

一次の文章を読んで後の問いに答えなさい。答えは、問十三以外は黄色の解答用紙に書きなさい。問十三の答えは、国語五の解答らんに書きなさい。字数の指定のある問題は、句読点も一字と数えます。

〈ここまでのあらすじ〉

大分県の旧家に生まれた瀧廉太郎は、子どものころから音楽の才能に恵まれ、国の役人である父と家族で東京暮らしをしていた。和琴の手ほどきをしてくれた姉の利恵は病弱で、わずか二十歳で結核のために亡くなってしまった。父は大分の竹田に転動になっていた。

小学校の学期を切りのいいところまで終えた廉太郎は、父吉弘たちの住む竹田へと引越すことになった。もはや廉太郎には東京にいる理由もなかったし、一人でお屋敷にいと、失われてしまったものの大きさをことさらに突きつけられてしまうだけに、手紙で引越しの話をされたときにはほっとした。

大分の竹田には、いくつも鉄道を乗り継ぎ、駅馬車を駆使してようやくついた。東京の「闊達さ」を見慣れてきた廉太郎からすれば、竹田の光景は異郷に他ならなかった。小さな川が東西に流れ、街道が川に沿ってのびる中、街道沿いに並ぶ家々が寄り添うようにして町を形作っている。新しい建物は数えるほどしかなく、古くからの小粋な城下町の雰囲気をも多分に残していた。馬車の車窓から青々とした山並みを眺め、新しい生活に期待と不安をにじませながら、竹田の土を踏んだ。

「苦勞だったな」

武家屋敷をそのまま召上げたという郡長官舎の玄関で廉太郎を出迎えた吉弘の第一声は「それだった。役所の部下に対しても同じ言葉を遣うのだろうと勘繰りたくもなるほどに無感動な言葉だった。

吉弘の後ろにかしづくように控える母の正が東京での廉太郎の生活を聞きたがった。だが、すぐに母の真意に気づき、利恵の最後の日々の暮らしを話して聞かせた。

廉太郎は旧城下町の外れに立つ直入郡高等小学校に通うことになった。総じて同級生たちは心穏やかで素朴な者たちだったからすぐにとけ込むことができた。かけっこも一番、勉強も一番の廉太郎はすぐに皆へ「人気者になった。

ようやく竹田にも慣れてきたある日、廉太郎は学校で「あるもの」を見た。

それは物置代わりに使われている教室の隅っこに置かれていた。

埃っぽい空気の満ちる中、脚の折れた木製の椅子や机、使っていない鉦や撥と一緒に埃をかぶっていたそれは、高さ三尺、横幅三尺、奥行き二尺ほど——学校で教わった西洋式の尺貫法なら、それぞれ〇・九メートル、〇・九メートル、〇・六メートルの木製の箱だった。だが、ただの箱ではないことはすぐに分かった。上部がわずかにせり出し、下の方が足の甲一つ分ほど奥まっており、足元には足踏みのような小さな板が斜めに取りつけてある。上面には蝶番があり、蓋になっているらしい。

好奇心に負けてその蓋を開けた瞬間、埃が舞い、きらきらと日の光を反射した。だが、そんなことが気にならないほど、廉太郎は目の前に現

れたものに「A」づけになっていた。

白く細長い木の板と、一回り小さい黒い板が並んでいる。交互に並んでいるわけではなく、なんとなく法則めいたものがあるようだった。

それが証か、左から、白、黒、白、黒、白、白、黒、白、黒、白……という配列がずらりと一直線にあり、黒の板は白の板の上に乗っている。

廉太郎は一つ、思い当たるものがあった。父の取っている新聞に載っていた、西洋楽器の「洋琴」ではないか、と。だが、首をかしげた。東京ならいざ知らず、竹田にそんな楽器があるとは思えなかった。

それに、洋琴は筐体を黒く塗っていると書かれていたのに、この箱は木目が浮いている。

板の一つを押してみる。だが、何も起こらない。

木の板をすべて押してみた。それでも何も起こらない。楽器ではないのかもしれないといぶかしみながらふと、足元の踏み板に足を乗せた。

その時、箱からけたたましい音が上がった。まるで鯨が鳴くような——いや、鯨が鳴いたところなど見たことはなかったからきつとこんな声だろうという想像でしかなかったにせよ——、そんな音だった。

しばし茫然としてみると、廊下から教師がやってきた。竹田には珍しい洋服姿の若い教師は、いたずらをしちゃいかと竹田の強い訛りで注意をしてきた。

「これは何ですか」

廉太郎がそう聞くと、教師はやはり訛りの強い言葉で教えてくれた。

これは風琴——リードオルガンという楽器で、校長が東京で買いつけてきたものの弾ける者がおらず、こうして埃をかぶっているのだという。

東京を離れてから——利恵が死んでから——、楽器に触れていなかった。利恵の使っていた琴は焼いてしまったし、母の正は琴を袋から出そうとしなかった。「ア」火の消えたような家に

倦んでいた廉太郎にとって、この楽器との出会いは死んだ利恵の思し召しにも思えた。

それから、廉太郎は毎日のようにオルガンに触れた。

最初は利恵から教わった「最初」の曲を弾いたが、すぐに鍵盤の運指に慣れてしまった。「イ」そのうち、左右の手で同時に二つの旋律を弾けないだろうかと考え、試してみると音が弱くなってしまったものの足元の踏み板を強く踏めば解決することも分かった。かくして右手で旋律を、左手で伴奏をつけることを覚えた。利恵が旋律を弾き廉太郎が合わせるというかつて二人でやっていたやり取りを一人で再現するかのようだった。

「ウ」

その頃には、物置には物珍しげな顔をした生徒や教師もやってくるようになった。「エ」

「誰も弾けなかったオルガンを覚えるとは」

「瀧はすごいなあ」「オ」

ついには教師から「オルガンの弾き方を教えてくれ」と頼まれるに至った。

そんな頃だった。瀧家に、ある届け物がなされた。その小さな荷を開けるなり、吉弘はあからさまに嫌な顔をした。

「大吉は変なものを送ってくる……」

洋間のテーブルの上に置かれたそれは、大きさ四十センチほどでつややかな茶色の体を光らせる瓢箪型の何かだった。だが、一目見た瞬間に楽器だと直感した。ピンと張られている四本の弦。柱はないらしい。

吉弘の取っている新聞に載っていた。西洋楽器のバイオリンだ。

ずっと夢見ていたものがこうして眼前にある。その驚きでいっぱいだった。

だが、吉弘は廉太郎の好奇心に先回りするように **A** を刺した。

「触っちゃならん。学校からも聞いておるぞ。休み時間となると風琴を弾いておるそうではないか。瀧家の『惣領息子』もあろう者が、芸人の真似事などするでない」

せっかくのバイオリンは入っていた革のケースに収められると洋間の棚の上に置かれてしまい、それからは洋間に近付くことさえ禁じられてしまった。

だが、廉太郎の思いの高まりは止まらない。

5 廉太郎はひそかに計画を練った。

廉太郎は一人、竹田の町の東にある岡城の石段を上っていた。刺すような日差し、蟬時雨が廉太郎の頭めがけて落ちてくる。ほとばしる汗をふきながら、廉太郎はしっかりと「一件のバイオリンケースを胸に抱いていた。

高等小学校の友達に聞いた。

『音をいくら立てても気にならないところってないかい？』

教えてくれたのが、ここ岡城だった。

かつてはこの地の殿様のお城だったらしいが、「御一新に伴い建物はすべて取り壊され、今では石垣だけが残されている。この城は山の上にあり、周りは鬱蒼とした森に囲まれているから音なんて簡単に紛れる、というのが友達の言だった。

バイオリンは、誰もいない時をミハ力らって洋間に忍び込み持ち出した。鍵はかかっているから、人の目をかいくぐればそれでいい。

それにしても——。岡城がこれほどまでに険しいとは思ってもみなかった。石段の続く山道を見上げた廉太郎はあごにたまる汗をぐいと拭いた。

ほんの二十年前までは人が住んでいたのだからと甘く見ていたものもある。だが、わずかな間に人の造った物は容易に形を変えてしまうことを知った。石段や石畳は雨風や木の根の作用によって子どもの歯のようにながたがたになっている。上るだけでも難儀し、ちよつとしたところで蹴つまずきそうになる。

ふうふう言いながら、傾きかけ苔むした石段を上っていくと、やがて開けたところに出た。かつて、ここには天守が立っていたのだろう。城全体を見渡すことができるような真四角な高台だった。恐る恐る端に寄って切り立った崖から下を眺めると、悠然と流れる川の向こうにある竹田の町も一望できた。いつも通っている学校や町外れにある廉太郎の家の姿も、米粒ばかりの大きさとなって眼下にある。

6 柔らかな風が吹き渡り、廉太郎の前髪をかすめていく。頭をなでられたような錯覚にも襲われた。

廉太郎はケースの中からバイオリンを取り出した。

かつて新聞でバイオリンの記事を読んだとき、何度も何度も頭の中でその操法を想像してきた。そらんじることができるようになると読み込んだ記事を思い出しながら、廉太郎はバイオリンの棹部分——ネック——を左手で持ち、胴部分の底部についている、黒い半月型の部品にあごを乗せ、肩でカツくようにして構えた。

馬の尻尾の毛が張られた棒——弓というらしい——を右手に握って弦にびたりと沿わせ、そのまま引いた。弓を弦にこすりつけることで音を立てるバイオリンの操法は知識として知っている。

最初は上手い音が出なかった。まるで黒板を爪でひつかいたようなおぞましい音が出るばかりだったが、しばらく繰り返すとようやく流麗な音が出た。上手く弓を操ってやれば、長い間、奥行きのある音が鳴り続ける。

次に左手を使ってみることにした。この楽器には琴のように柱はない。琴は柱を使って弦の音を決めているが、バイオリンは柱ではなく自らの指で弦を押さえ、音を作るらしい。その点は三味線に似ているのだろうが、廉太郎は三味線に触れたことはない。

右手に意識を集めれば左手の保持が甘くなり、逆に左の指先に気を取られると、弓を引く手がおろそかになる。特に、左の指先に響くしびれに慣れるまでに時間がかかった。こんなに難しい楽器が世にあるのか、と驚いたものの、しばらくやり合っているうちに、ようやく音のつぼを理解した。

息をついた廉太郎は、岡城の上から竹田の町を見下ろしながら、曲を弾いた。あまり曲を知らない廉太郎は、自然と利恵に教えてもらった琴の曲を選んでいった。

最初は伴奏を弾いていた。だが、廉太郎はすぐに己のやっていることの滑稽に気づいた。それは、7 二枚目のいない芝居のようだった。

廉太郎は、かつて利恵の弾いていた旋律を弾き始めた。

発見があった。利恵が弾いている時には、明るい音調の曲だとばかり思っていた。だが、実際に弾いてみると、懐かしさや郷愁を想起させるような哀調の曲だったと気づかされたと同時に、ある事実を突きつけられたような気分にもなった。

利恵はそこまで琴が上手くなかったのだと。

丁寧に、そしてゆつくりと、利恵の好きだった曲を弾き終えた。

頬に冷たいものが流れる感触があつて、青い空を見上げた後、8 ようやく涙がこぼれたことを知った。そしてそれからは、とめどなく涙が流れ続けた。

利恵の言葉が不意によみがえる。

『もしあなたが音楽に関わり続けてくれたなら、わたしはずっと、あなたの奏でる音色の中に生き続けることができるのに』

廉太郎の中では、ある思いが形を結びつつあった。

音楽をやりたい。楽器を弾いていきたい。姉さんの分も。

気づけば太陽は傾き、西の山に日輪が迫ろうとしていた。赤く染まる竹田の町、そして岡城の石垣が、少しずつ闇にのまれようとしていた。



「廉太郎、話がある」

寒さ厳しい休みの日、吉弘の書斎に呼ばれた。

いつもは出入りを禁じられている応接間のドアを開くと、三面を本棚で囲まれた、いかにも圧迫感のある部屋の真ん中に置かれた椅子セットの一つに座る吉弘の姿があった。⁹ いつも家では¹²着流し姿でいる父が、この日に限っては役人として出仕する時のようにズボンにシャツ姿だ。ちゃんと背を伸ばして一礼し書斎の中に足を踏み入れると、吉弘は表情を変えることなく、部屋の中に置かれた革張りの椅子を指し、座るように勧めてきた。

椅子に腰を下ろしたのをミハカラうように、吉弘は胸の前で手を組んだ。

「さて、廉太郎。お前を呼んだのは他でもない。これからのお前の進路のことだ」

廉太郎は次の三月で高等小学校を卒業することになる。

「働くのを否むつもりはないが、お前の成績は悪くない。さらに上の学校に行つて、¹³官吏としてお国のために尽くしてほしいというのが父の願いだ」

父上の言いそうなことだと、思わず廉太郎は噴き出しそうになつてしまった。

確かに、廉太郎の成績は悪くないどころか、秀才が揃う高等小学校の中でもかなりの上位だ。それこそ、頑張れば大学に進めるだけの頭の持ち合わせはある。

だが――。廉太郎は首を振った。

「父上、僕には、やりたいことがあるんです」

吉弘の目が光った。¹⁰ 思わず背中が冷たいものが走つたが、怖気づきそうになる己を¹⁴叱咤して、心に秘めていた思いを口にした。

「僕は、東京の音楽学校に行きたいのです」

吉弘は出し抜けに目の前のテーブルを強くたたいた。

「今、¹⁵西洋列強に伍してゆかんと皆が齒を食いしばつておるといふに、お前は¹¹言つに事欠いて、芸人になるつもりか」

吉弘はかつて、かの大久保利通卿に引き立てられた経歴の持ち主だ。噂に聞く大久保卿の謹厳ぶりは吉弘にも受け継がれている。

「時々、バイオリンを持ち出しているようだ。この父の目はフシアナではないぞ。嘆かわしくてならん。瀧家の跡取りが芸に¹²現を抜かすとは」

と、その時だった。ノックもなしにドアが開いた。

「まあまあ、おじさん、それくらいにしてやらないと、廉太郎がかわいそうですよ」

涼しげな言と共に部屋に現れたのは、東京で仕事をしているはずの従兄、瀧大吉だった。¹¹ この日も細身の白シャツに黒のズボンという姿だったが、外からやつてきたばかりなのか、外套にマフラー、ハットをかぶつた垢抜けた姿だった。

突然の救い主の登場に廉太郎は何も言えずに見上げるばかりだった。すると、大吉は曰くありげに、にこりと笑いかけてきた。

「あれ、おじさんから聞いてないのか。長い休暇が取れたんだ。それに、

廉太郎の進路相談に乗つてほしいとおじさんに頼まれてな。ですよね、おじさん」

脱いだ外套とマフラーを勝手に外套掛けに引つけた大吉が問いかけると、やや押され気味に吉弘はうなずき、大吉は¹⁶工部大学校も卒業しているし東京にも住んでいるゆえ、大学に行くなら様子を聞いてみたかったのだ、と述べた。

大吉は廉太郎の横の椅子に深く腰掛けた。ぎしり、と悲鳴を上げるバネの音にも、心が冷えるような心地がした。

「外から聞いてしまいましたよ。何でも、廉太郎は音楽学校に行きたいとか」

「何とか言つてやつてくれ」吉弘は頭を抱えた。「男子が左様な道に進むべきではないとな」

だが、大吉は予想だにしないことを口にした。

「いえ、おじさん。実は、音楽学校と高等師範学校の合併話が出ています」

吉弘の **B** が少し動いた。

畳みかけるように、大吉は続けた。

「存じの通り、師範学校は教師を育成する学校です。政府はこれから、音楽を教育に取り込もうとしているようです」

「世も末だな」吉弘は吐きすてた。「学校で芸を教えるというのか」

「西洋列強も音楽を教育に取り入れているようですよ」

冷ややかにさえ聞こえる大吉の言葉に、吉弘は、むう、と小さいうなり声を返した。

横に座る廉太郎は大吉の弁に舌を巻いていた。吉弘に響きそうな言葉を選んで口にしていく。

大吉は言葉に熱を込めずになおも続ける。

「師範学校を出れば全国の学校で物を教えることができます。東京の師範学校ならなおのことです。我らの¹⁷本貫地である大分で教師になつて、末は校長という道もいいのではないでしょうか」

校長といえば地域のメイシ、かつては藩の国家老だった瀧家からすれば、最も通りのいい社会的地位だろう。そこまで計算された物言いに聞こえた。まるで、¹²大吉の言葉は将棋のようだ。吉弘の大駒を封じた上で己の駒を動かし、徐々に玉の逃げ道をふさいでいる。

さらに言い募ろうとする大吉であったが、手を広げて言を制した吉弘に阻まれた。しばし¹⁸黙考に沈んだ吉弘は、天井を見上げてため息をついた。

「音楽学校、か……。下らぬ道を望んだものだ」

吉弘の瞳が廉太郎をとらえた。己の子だからという容赦がない。一個の人材を見定めようという、¹⁹ 惨憺な官僚の目がそこにあつた。

廉太郎がかすれ声を上げかけると吉弘は椅子から立ち上がり、奥の書き物机に置かれていたパイプを持つて戻ってきた。マッチを擦つて火を点け口から煙を吐き出すと、紫煙に目を細めながら謹厳な面持ちで口にした。

「教師になれ。音楽で教師となり、やがては校長。それがお前の生きる道だ」

吉弘のパイプから煙が上がっている。



煙草の香りが鼻をくすぐる。そんな中、廉太郎の心中にキョライしていたのは、己には才能がないと嘆く利恵の姿だった。

己とて、乗り越えられない壁に阻まれる日がやってくるかもしれない。だが、挑戦することもなく音楽の道を諦めたくはなかった。そのためには、嘘だつていとわれない。

「わかりました」

小さく、頷いた。

13 父に、初めて嘘をついた。かすかな罪悪感に震える。

だが、吉弘がそれに気づいた様子はない。パイプの中身を灰皿の上に空け、パイプをゆつくりとテーブルの上に置いた。

「[注20] 東京音楽学校、目指してみろ」

「ありがとうございます、父上」

胸がいつぱいで、頭を下げるので精いっぱいだった。

吉弘の興味は他のところにあるらしかった。Bをひそめながら疑問を発した。

「東京音楽学校とやらに入らためには、どうしたらいいのだ」

大吉が応じた。

「予科に入り、一年間の選抜を受ける必要があります。予科入学試験はそんなに厳しくはないそうですが、入学してからの選抜が厳しいそうです。それこそ、九割はそこでふるい落とされるとか」

「才能なき者は、一年余りであきらめさせられる仕組みということか。」

良心的だ。ならば、廉太郎」

吉弘は廉太郎に向かい目を光らせた。

「予科を突破してみせろ。一年で芽が出なければ、潔くあきらめて官吏の道を目指せ。できるな」

否の選択肢はなかった。厳格で頑固な父から譲歩を引き出したのだ。

これ以上の譲歩があり得ないことは、これまでの十四年ほどの日々でいやというほど思い知らされている。

半ば無意識に、廉太郎は頷いていた。

「下宿の件はご安心あれ。僕の家をテキキョウししよう」

大吉が言うと、吉弘は小さく息をついた。

問一 本文中の太字のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 1 失われてしまったもの とありますが、どのようなことを指していますか。次のア～エの中から最もふさわしいものを選び記号で答えなさい。

ア 自由な東京暮らしができなくなったということ。

ウ 父吉弘が東京からいなくなってしまったこと。

イ 姉の利恵が亡くなったということ。

エ 世の中が変わって武士の身分でなくなってしまったこと。

問三 本文中のaとdの[それ]の中から性質のちがうものを一つ選び記号で答えなさい。

問四 空らんへ へに入る言葉としてもっともふさわしいものを次のア～エから選び記号で答えなさい。

ア 一計を案じられ

イ 一矢を報いられ

ウ 一笑に付され

エ 一目置かれ

「ああ、お前が後見についてくれるなら助かる。うちの惣領息子を頼む」

14 わずかに大吉の顔に影が差したのにも気づき得なかった。音楽を学ぶことができる。大手を振って楽器に触れることができる。そんな喜びに目を曇らされて、周りのことが何も見えていなかった。

瀧廉太郎十四歳。まだ、己が何者かも分かっていない若者は、前途洋々にして[注21] 茫漠たる未来に、ただただ輝きを見出していった。

(谷津矢車『廉太郎ノオト』)

【注】

- 1 闊達さ こだわりがなく自由な様子。
- 2 鉦 金属でできた小型の打楽器。
- 3 撥 打楽器を打ち鳴らす棒。
- 4 洋琴 ピアノのこと。
- 5 筐体 楽器の外側。
- 6 倦んで あきて
- 7 箏曲 琴で演奏する曲。
- 8 柱 弦をささえ、音程を調節するもの。
- 9 惣領息子 跡継ぎの長男。
- 10 件の 例の
- 11 御一新 明治維新。
- 12 着流し 男性の、はかまをつけない着物だけの姿。
- 13 官吏 国の仕事をする役人。
- 14 叱咤 しっかりとやるように励ますこと。
- 15 西洋列強に伍する 西洋の強い国と肩をならべる。
- 16 工部大学校 現在の東京大学工学部の前身。
- 17 本貫地 本籍地、また出身地。
- 18 黙考に沈む だまって考え込むこと。
- 19 伶俐 かしこくて頭の働きの優れている様子。
- 20 東京音楽学校 現在の東京藝術大学音楽学部。
- 21 茫漠たる はつきりしない様子。

問五 2 あるもの とは何のことですか。本文中から七字の言葉をさがし、ぬき出して答えなさい。

問六 本文中に二か所ある空らん A には同じ言葉が入ります。ひらがな二字で考えて答えなさい。

問七 3 竹田にそんな楽器があるとは思えなかった とありますが、廉太郎がこのように思ったのはなぜですか。次のア～エの中からもっともよくあてはまるものを選び記号で答えなさい。

- ア いくつも鉄道を乗りつぎ、駅馬車を使ってようやくたどりつくような土地だから。
- イ 街道沿いに並ぶ家々が寄り添うようにして町を形作っている土地だから。
- ウ 古くからの小粋な城下町の雰囲気をも分に残す土地だから。
- エ 総じて心穏やかで素朴な者が同級生に多い土地だから。

問八 次の一文は本文中のどこに入るのがふさわしいですか。本文中の空らん「ア」「イ」「ウ」「エ」から一つ選び記号で答えなさい。

オルガンの横には、いつだって死んだ姉が薄く微笑んでたたずんでいる気がした。

問九 4 火の消えたような家 とありますが、どのような家になったというのですか。次のア～エの中からもっともよくあてはまるものを選び記号で答えなさい。

- ア 厳格な父にしばられて自由のない家。
- イ 東京のような活気はない田舎の家。
- ウ 音楽を楽しむ者がいない家。
- エ 家族がおたがいに話さない家。

問十 5 廉太郎はひそかに計画を練った とありますが、どのような計画ですか。解答らんに合うように二十字以内で説明しなさい。

問十一 6 柔らかな風が吹き渡り、廉太郎の前髪をかすめていく。頭をなでられたような錯覚にも襲われた とありますが、この表現は廉太郎のどのような心情を印象付けていますか。次のア～エの中からもっともよくあてはまるものを選び記号で答えなさい。

- ア 新しいことに会える幸福感。
- イ すべてを手に入れられる万能感。
- ウ 困難に立ち向かおうとする決意。
- エ 音楽の才能があるという自信。

問十二 7 二枚目のいない芝居 とは何をたえていますか。本文中の言葉を用いて答えなさい。

問十三 8 ようやく涙がこぼれたことを知った。そしてそれから、とめどなく涙が流れ続けた とありますが、この時の廉太郎の気持ちを「共感」と「決意」の二つの言葉を使って説明しなさい。



問十四 10 思わず背中に冷たいものが走った。とはどういうことですか。次のア～エの中からもっともよくあてはまるものを選び記号で答えなさい。

- ア はじめは父の言いそうなことだと高をくくっていたが、成り行きで父の願いを軽く拒否したあとで、事の深刻さにおびえたということ。
- イ 優秀な廉太郎は負けずらいだったので、自分の意志を押し通すために父にどのような言い返そうかと必死に考えていたということ。
- ウ 父の言葉が予想通りだったため、思わずふき出しそうになり、それが父にわかってしまったのではないかとひやひやしたということ。
- エ 進路についての父の願いを受け入れられず、自分の意志を伝えようとしてみたものの、父の怒りを買いそうでおそろしくなったこと。

問十五 ①・②のここでの意味として、もっともよくあてはまるものをそれぞれ次のア～エの中から選び記号で答えなさい。

- ① 言うに事欠いて
 - ア あえて
 - イ 言うことを聞かずに
 - ウ よりによつて
 - エ 割をくつて
- ② 現を抜かす
 - ア 理想を求める
 - イ 夢中になる
 - ウ 関心を持つ
 - エ 望みをかける

問十六 9 いつも家では着流し姿でいる父が、この日に限っては役人として出仕する時のようにズボンにシャツ姿だ

11 この日も細身の白シャツに黒のズボンという姿だったが、外からやってきたばかりなのか、外套にマフラー、ハットをかぶった垢抜けた姿だった。とありますが、このような身なりや、本文中の言動からわかる吉弘と大吉の人柄としてもふさわしいものを次のア～エの中からそれぞれ選び記号で答えなさい。

- ア 薄情で冷たく頑固な人柄。
- イ 大胆で気がきいており、さっぱりした人柄。
- ウ 誠実でつつしみ深く慎重な人柄。
- エ 厳しくまじめで重々しい人柄。
- オ 無遠慮でなれなれしく軽はずみな人柄。
- カ 人情に厚く、優しい細やかな人柄。

問十七 本文中に二か所ある空らん B には同じ言葉が入ります。ひらがな二字で考えて答えなさい。

問十八 12 大吉の言葉は将棋のようだ。とありますが、どのような様子をたとえているのですか。次の説明文の《1》《2》《3》に入る言葉を本文中からさがし、それぞれぬき出して答えなさい。

《1》《2》《3》になつてほしいという父の願いを封じて、やがては《2》になる利点を示し、廉太郎が《3》に行くことを認めさせる様子。

問十九 13 父に、初めて嘘をついた。とありますが、どのようなことを「嘘」と言っているのですか。嘘をついた理由をふくめて説明しなさい。

問二十 14 わずかに大吉の顔に影が差した。のはなぜですか。その理由としてあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 廉太郎の気持ちを理解しようと思せず、世間体ばかりを気にして思いのままにする吉弘に違和感をもったから。
- イ 自分の希望を了解してもらえて喜んでる廉太郎を、吉弘の望み通りにするのは荷が重かったから。
- ウ 廉太郎は吉弘の望み通りにはならず、大吉に対する吉弘の期待をうらぎることになる予感がしたから。
- エ 自分のおかげで好きな道に進めることになった廉太郎に、全く自分への感謝の様子がなく不快だったから。

三八力

問
一

らつて

カツ

→

フシアナ

メイシ

キヨライ

テイキョウ

後見

問

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

計画。

問十一

問十二

問十三 答えは **国語一五** の解答らんに書きなさい。

問十四

問十五 ①

②

問十六 吉弘

大吉

問十七

問十八
1

2

3

問十九

問二十

